

4 『雲庵抄』について

宮川 浩也

『雲庵抄』は、福井・三崎家に所蔵される、『難経俗解』に対する谷野一栢の注釈書である。谷野の号をとって『雲庵抄』と呼んでいる。

〈へすでに明らかになつてゐること〉

本書については、小曾戸氏に既報があり（目でみる漢方史料館（八七））『漢方の臨床』四二巻八号）、次の二点にまとめることができる。

①『勿聴子俗解八十一難経』（明・熊宗立著）に対する谷野一栢の注釈書（自筆）であり、日本人の著述になる現存最古の『難経』注釈書である。

②本書は、永正六年（一五〇九）頃の初稿本を、補正した再稿本である。一冊本であるが、元は二冊に装訂されていた。上冊は序文から二十九難まで、下冊は三十難から末まで。

〈今回新たに確認できたこと〉
その一

識語に「時享祿二己丑年孟冬日、雲庵叟一栢抄之」とあるから、享祿二年（一五二九）に谷野一栢が書いたものである。さらに「右此難経抄両冊者二十年前於和泉府自筆之」とあるから、永正六年（一五〇九）頃には初稿本を執筆していたらしい。『八十一難経抄』（杏雨書屋・乾三二一三）の記録によれば、一栢は永正十年（一五一一）に『難経』を講義しているから、『雲庵抄』執筆以前に、『難経』の講義は行つていたことになる。

冒頭から数葉（序文から第一難ころ）に細字による注釈が多く見られる。「細書之頭二図者、延寿院之講義也、延寿院講釈之聞書」とあるように、曲直瀬玄朔（一五四九〜一六三二）の講義を聞いたときのメモが書かれている。その中に「東井曰」「朔曰」ともある。つまり、これを書いたのは谷野一栢ではなく、後代の者である。曲直瀬玄朔が延命院から延寿院に号を改めたのが一五九七年であるから、これ以降に、玄朔の講義を受けた時のメモであろう。

玄朔の講義は、『難経抄』（杏雨書屋・杏三三四八）として、寛永元年（二六二四）に刊行されている。識語には「慶長尚回庚寅年冬日南至東井叟玄朔」とあり、慶長十九年（二六一四）に、「壯歳」の原稿を校正した旨を記すから、『雲庵抄』細字注の延寿院の講義とは、玄朔が五十歳代（一六〇〇年初頭）ころの講義と考えられる。

その二

識語に「右此難経抄兩冊者二十年前於和泉府自筆之、今聞、往々流布於世」とあり、二十年前に書いたものが、書き写されて、一五二九年頃には数種の異本が出回っていたようである。現在、『八十一難経注』（杏雨書屋・貴二三九）と『八十一難経抄』（既出）が確認できる。『八十一難経注』は、永禄九年（二五六六）に僧禅柏が書き写したもので、序文・一難から二十九難まで存し、内容『雲庵抄』とほぼ同じである。『八十一難経抄』は著者未詳、序文・一難から二十九難まで存し、序文の一部と本文のほぼ全てが『雲庵抄』である。両書には延寿院の講義注釈が含まれていないことや、両書が二十九難までしか存しないこと（『雲庵抄』上冊に相当する）からみても、『雲庵

抄』から書き写したものであろう。

また、識語に「予頃寓居越之一乗、閑暇日再正之、復加潤色、不類餘本者也」と、再稿にあたって新たに書き加えたことをいう。二種の異本に採録されなかった注釈は、おそらく再稿にあたって新たに加えられてものと考えられる。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）